

日本イエナプラン教育協会



ニュースレター Vol.20 2013. 10月号

発行元：日本イエナプラン教育協会

編集：田村 悠子

住所：〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: Info@japanjenaplan.org

ついに、ニュースレターも20号となりました！今月のニュースレターの夏季オランダ研修報告は、別ファイルで掲載させて頂いております（宅明健太さまより）。会員ページに【2013年夏季オランダ研修報告】とございますので、ダウンロードしてそちらもお楽しみ下さい。
編集（田村）

第19回

ペダゴジカル・シチュエーション

～～子どもの学びを動機づけるための仕組み～～

協会代表 リヒテルズ直子

イエナプラン教育について学んでいらっしゃる皆さんの中には、これまで、私が書いたものや、講演、ワークショップの中、また、オランダでの研修などで、

「先生でも『わからない』と言っていい。その方が逆に子どもたちのやる気が起きる。」とか、

「先生が教えるのが学校ではない、子どもたちが学ぶのが学校だ。」とか、

「でも、イエナプランは自由放任では決していない。子どもたちの主体的取り組みと共に、教える教員も、積極的に子どもたちの学びを励まし、刺激しなくてはならない。」

などと私が言うのを、何度も聞いたり読んだりしてこれたのではないか、と思います。

けれども、「教えるのを最低限に控えるとすると、では、教員である自分には何ができるのか、教員が積極的にかかわるといっても、一体何をすればよいのか。」とっておられる方も少なくないのではないのでしょうか。または、「なんとなくわかる気はするのだけど、具体的に何をどうすればよいのか分からない。」と考えておられる方もいらっしゃるかもしれません。

そこで大変重要なのが、《ペダゴジカル・シチュエーション》という考え方です。直訳すれば「教育学的情况」。つまり「教育学」（ペダゴジー＝子どもについての学問、子どもの発達に関わる学問）で科学的に検証されたデータを参考にしながら、子どもたちの発達が最大限に保障される環境づくりをしていく、ということです。

そして、こう考えてみると、私たちが既に学び知っているイエナプラン教育の主要なコンセプトは、どれもみな、まさに、その《ペダゴジカル・シチュエーション》づくりに他ならないということに気づかれるはずです。今号の記事では、このことについて、①物理的環境（空間マネジメント）、②学校生活のリズム（時間マネジメント）、③教員と子どもとの関係（専門職としての教員）、④社会的環境（人的マネジメント）、という4つの観点からお話してみようと思います。

1. 物理的環境（空間マネジメント）

今年の夏季オランダ研修でも特に重点を置きましたが、イエナプランの学校では、一人一人の学びの場が、実に多様に存在しています。子ども達は、これまでの産業化社会型の学校のように、教室にたった一つだけある「自分の席」に一日中ずっと着いているのではなく、さまざまな場を自由に動きながら学びます。それは、（常時設けられた）サークルの中の席、小グループでの席、教室内に作ってあるロフト、教室の隅・廊下・踊り場などに置かれているテーブルやソファ、コンピューター用の机、菜園、運動場、体育館、大小のステージ、生徒用キッチンなどです。日本と比べて目立つのは、教室の中に、生徒数よりも多くの席（場）があること、教室の

中に限らず、外にも学べる場がたくさん設けられていること、そうした場では、必ずしもいつも姿勢を正すように注意されることなく、家庭にいるのと同じように、ゆったりとリラックスした姿勢で学ぶ場があることでしょう。

いつも教師から見下ろされ監視され、姿勢を注意されて学ぶよりも、リラックスして学ぶ方が知識を吸収し、学びの意欲が起きることは、脳科学などでも証明されていることです。

夏季研修のグループで訪れたネイメーヘン市の小学校では、新しい試みとして、幼児クラス(4-5歳児)から12歳までの子どもたちが、週に何回か、一堂に集まり、サークルで対話をし、8年間の年齢の差のある子ども達が、一緒に何かのテーマに取り組みながら学ぶ場が作られていました。講堂の様に広い場には、中央に、スタジアムの観客席を模倣したような円形の台があり、4-12歳の子どものみならず一緒にサークルを作る場が置いてありました。またマルチプルインテリジェンスの考えに基づいて、さまざまなインテリジェンスを刺激するための常設の部屋が周囲に用意されていました。自然スマートのための探求資料室、音楽スマートのための防音壁で囲まれた楽器室、内省スマートのため静かに一人きりになって物を考えることのできる部屋などです。

かつてオランダ・イエナプラン教育協会の研究者代表だったケース・ボット先生がよく言われていましたが、「学校には、何か特定の学びを意図するのではなく、いろいろなものが見雑多に置いてあり、そこから子ども達が発見的・探求的に学びを引き出せるように工夫された場所があるべきだ。」と言われていたことも思い出します。整然と全てに意図的な教材があるというだけでなく、何を学んで欲しいというはっきりとした意図はないが、そこで、子どもたちが、思いもよらない発想でそこにあるものから刺激を受け探求を始めていく、、そういう場を置いておくことはとても重要であるということです。

実際、マルチプルインテリジェンスに沿って作られたそれぞれのコーナーには、いろいろなものを、各インテリジェンス(スマート)ごとに分類して置いてはありますが、では、それから、子どもたちが何を考え始め、何に取り組むのか、ということは、意図していません。大人が思いもよらない発想で、探究していくことが重要なのです。

良く考えてみると、このような場は、家庭ではなかなか作れないものです。子ども達の中には、家に一冊も本がない家庭もあるでしょうし、庭もなく、周囲に公園もなく、自然に触れる時間が限られている子どももいるでしょう。学校は、そういう意味でも、すべての子どもに、まだ気づかれていない彼らの関心や興味を最大限に引き出す、ペダゴジカルな意味での、空間的環境を整えておくべきなのです。そうすることで、まだ隠れ眠っている子どもたちの才能を引き出し、彼らの未来を開いていくことができるからです。

2. 学校のリズム(時間マネジメント)

イエナプラン教育では、時間割を科目ずつに分けず、4つの活動がリズムに循環するという事はみなさんもご存じのとおりです。しかし、4つの活動、つまりサークル対話・仕事(学習)・遊び・催しが、いつも決まってこの順番で循環しているというわけではありません。

普通は、朝登校しての15分をサークル対話の時間にあて、その後、リーディングや算数などのインストラクションをしながら、仕事(学習)の中でも、個別に集中的にやる学習を午前中に充てています。なぜなら、子どもたちは、まだ登校してから間もなく、頭がすっきりしているからです。

そして、2時限続きのブロックアワーで自習とインストラクションを組み合わせた学習をした後、身体を動かし、学習のための集中を緩めて、解放的にレクリエーションのためにゲームやモノづくりなど「遊び」の時間を設定しています。体育や音楽、水泳教室などをそれに代えることもあります。そして、「遊び」で心を解放し、すっきりした後で、もう一度、ブロックアワーで自習を中心に「仕事(学習)」の時間をもち、それからまた、サークルを作って昼食、お昼休みで体と心を解放します。緩急のリズムを使って仕事と遊びを交互にやり、その間に、サークルを作って静かに対話をしたり、誕生日などのお祝いをしたりします。

昼食後、外遊びをした後は、心身ともにそろそろ疲れてきます。大人だって眠くなる時間です。そこで、子ども達を個別の席にしばりつけるのではなく、比較的動きの多いグループ作業をベースにした共同学習の時間となります。そこでは、テーマに沿って探究的に学ぶワールドオリエンテーション、図画工作、プレゼンテーションの準備などが行われます。子どもたちは、自分の席だけに座っている必要はなく、グループで話し合ったり、戸外で何かを観察したり、共同で作品を作ったりします。



Photo: 宅明健太

そして、最後はもう一度輪になってサークル対話をしながら、その日をみんなで振り返って締めくくります。特に、その日何かが原因で喧嘩などのコンフリクトがあった場合、けがや病気、失敗など、子どもの心に傷がつくようなことがあった場合には、そのサークルで、その気持ちを子どもたちみんなに共有させ、グループとして、辛い思いをしているこのことを思いやる時間を持って一日を終えます。なぜなら、子ども達が抱える問題をオープンに表に出し、それについて共有することは、問題を抱えている子どもだけではなく全ての子どもにとって「安心」を与えることであり、教育学(ペダゴジー)的に見て、翌日の子どもたちの発達を保障するための条件となるからです。

3. 教員(グループリーダー)と子どもとの関係(専門職としての教員)

上のように、空間的に、また、時間的に、子どもたちの学習が最適な条件で行われるよう環境、すなわち《ペダゴジカル・シチュエーション》を整えるのは、教室の子ども達の目に見える明らかな作業ではなく、子どもたちに気づかれないところでやる作業でもあります。

「良い教師とは、舞台の上でできるだけ立たないディレクターのようなものだ」

とイエナプランの専門家がよく言いますが、まさに、《ペダゴジカル・シチュエーション》作りとは、見えない場所でしっかり考え込まれて行われる作業、教職員がチームを作って、お互いに話し合っ作る場、子どもたちの様子を見ながら、常に継続して改善努力を続ける場でもあるのです。

こうして用意された《ペダゴジカル・シチュエーション》の中で、グループリーダー(教員)は、子ども達が学び発達していく姿を、後ろからしっかりと見守りながら、それぞれの子どものに必要な援助をしていきます。

そこでとても重要なのが、「子どもの問いかけ」に対して簡単に答えを出そうとしないこと、です。本協会の資料として、ヨス・エルストヘーストの『ライオン蟻に聞いてごらん』という有名な論文の翻訳を収めていますが、そこにもエッセンスとして描かれているのは、子ども達の問いに対して、「問いで応える」という態度です。答えを教えようとせず、「OOはどうなっているかな、そこに行ってみたら他に何が見える?」と、その子が、自分で自分の問いの答えを発見できるように道を拓くような問いをします。そして、それは、常に、「事実を確かめる」態度を子ども達に養うものでなければなりません。本当に、自分の目や耳や鼻や手で、つまり、自分の感覚を通して、物事の事実を確信していく態度を養うということです。

また、子どもが自立して自分から進んで学ぶということだけではなく、子ども同士お互いの間で、自分一人では気づけなかったことを教えてもらう、互いの力を引き出し、学び合っ行けるように、子ども達が互いに尊重的に関わり合うことを進んで促すようにします。イエナプランが、根幹グループ(クラスにいる3学年にまたがる異年齢グループ)を作って、なぜ、違いのある子ども達をグループにしているのか、の理由はそこにあります。

私たちは皆、自分とは異なる『他者』を必要としているのです。皆が同じになったら、学び合うことはできません。違いがあるからこそ、他者の力を借りることを学び、自分自身も、人のために役に立てると言うことが分かるようになるのです。

4. 社会的環境(人的マネジメント)

子ども達の安心・安全の保障は、クラスだけにとどまるものではありません。学校全体が、子ども達にとって「ここは私が参加し、その雰囲気に対して進んで責任を負いたくなる場だ。」と感じられるような社会的環境にするためには、教室の壁を越えて、学校全体が、一つの村のように、誰もが顔を合わせて挨拶をし合い、一緒に協力して活動を行い、共に喜び、また、共に悲しむ、共感の場であることが大切です。そのため、学校にいる教員たちは、自分たちの間の関係をスムーズにし、憶測・推測で物事を決めるのではなく、気になること、大切だと思ふことを常にオープンに話し合える関係を作っておきます。

そういう成熟した態度で接し合う大人たちに見守られているという確信が、子ども達をさらに学習に集中させ、自らの発達のために、懸命に働くことを促します。

同じことは、教職員だけにとどまらず、教員と保護者との関係にも言えます。教員と保護者とが、「モンスターペアレント」のように、相手の言葉を聞かず罵り合う関係になっていたら、子どもたちは、その対立の犠牲者となります。また、一般的にも、親と教員とは、子どもたちが毎日接する数少ない大人達です。



Photo: 宅明健太

その大人達が対立関係にあったり、気さくにも言える関係にないというのは、子ども達に、未来への希望を失わせるものです。未来に希望を無くした子ども達が、学習に励むでしょうか。社会に進んで参加しようと思うでしょうか。それがどんな内容のことであれ、子どもを巡って教員と保護者が対立し、お互いに率直に意見を言い、相手の言っていることに耳を傾け、協働でその子どもにとって最善の状況を生み出そうとしない場で、子どもは知的にも精神的にも健全な発達を遂げることはできないでしょう。

しかし、学校という組織に対して、保護者は、どこから参加したらよいのか、自分には何ができるのかは分からないものです。学校は、まず、教職員チームとして一つのビジョンを共有し、共に働くためのチームとなるべきです。そして、そのチームをベースに、保護者に「こんなことをしてもらいたい」「こんなことはお願いできないか」「あなたの持っている知識やスキルを子どもたちにも提供してもらえないか」と学校に招き入れていくとよいと思います。

こうした、子どもの発達を何よりも目指して、大人がお互いを尊重してつながり合うこと。それが、子どもたちの明るい希望を生みます。そして、未来への希望の元に学べば、その学びは意味や意義のある豊かなものとなります。

いかがでしょうか。あなたの学校、あなたの子どもの学校、そして、子どもがたくさん時間を過ごす家庭や地域に、《ペダゴジカル・シチュエーション》は保障されているでしょうか。もしまだないのなら、まず、上に挙げた一つ一つの項目を、丁寧に辿りながら、改善を始めてみてはどうでしょう。勉強しろ、と叱咤激励したり、塾や習い事に通わせたり、宿題を手伝うつもりで子どもが自分で考える前に何でも教えてしまったり、、、、そういうことが、子どもの発達にとって、どんなに大きな害をもたらすものであるか、、、、少しお分かりいただけたのではないのでしょうか。

そして、、、、《ペダゴジカル・シチュエーション》作りの、何よりも大きな第1歩は、子どもの発達に関わっている大人が、まず、「学習者」として学び続け、問い続ける人間、つまり、謙虚で、でも、人生を楽しみ、「世の中知らないことだらけだなあ」と生き生きと学び続けながら生きる人間になることなのです。



第4回春季オランダ研修参加者募集

2014年3月16日～21日 オランダのイエナプラン研修会社JAS(イエナプラン・アドバイス・アンド・スクーリング)による第4回目の春季オランダ・イエナプラン教育研修を、実施します。皆さまこの機会にぜひご参加下さい！
【JASのサイト：<http://www.jenaplan.nu/> 研修所のサイト：<http://www.hetbovenveen.nl/>】

◆日程◆

- 3月16日(日) 16時アムステルダム・スキポール空港集合(往復航空券は各自ご用意ください)。その後研修所のあるエヒテンに移動(貸切バスで約2時間)、ウェルカムディナーと部屋割り
- 3月17日(月) 研修第1日目(全日)
- 3月18日(火) 1校目のイエナプラン小学校視察(放課まで)
- 3月19日(水) 研修第2日目(全日)
- 3月20日(木) 研修第3日目(全日)、研修受講証の授与式
- 3月21日(金) 2校目のイエナプラン小学校(もしくは中学校)視察、その後スキポール空港へ移動

◆参加費◆

成人 860ユーロ(会員 830ユーロ)・大学生または大学院生 630ユーロ

◆定員◆

最低実施人数11名(参加希望者多数の場合30名まで許容の予定)

◆締め切り◆

2013年12月15日 ※定員に達し次第募集を終了いたします。

◆お申し込み◆

日本イエナプラン教育協会HPの研修の詳細が掲載されたページ【<http://news.japanjenaplan.org/?eid=20>】をご確認の上、info@japanjenaplan.org まで、件名を「オランダ研修申込」とし、氏名・年齢・所属・住所・連絡のつきやすい電話番号・メールアドレス・日本での連絡先をご記入のうえ、お申し込みください。
(個人情報)は緊急時の連絡先として使用いたします。公表はいたしませんのでご安心ください)

【会員特集】～イエナプラン教育と出会って～



イエナプラン教育に共感し、メーリングリストやFacebook、講演会に参加しているイエナな皆様！『日本の教育をより良くしていきたい』と同じ思いで集まった会員の方々が、どのような活動をされているかを特集をさせていただきます。

住んでいる場所は離れていても、時には疲れてしまうような事があっても、様々な現場でチャレンジしている仲間がいます。今回は濱大輔さんにイエナとの出会い、そしてその実践を語って頂きました。

なぜイエナプラン教育に惹かれたのか

濱 大輔

【小学校1年目 4月～7月】

小学校の教員として愛知県の豊橋市に赴任してきた4年前。初めての土地、初めての小学校。不安もありましたが、期待の方が大きいスタートでした。しかし、いざ始まってみると、授業は全くうまく行きませんでした。国語、社会、理科…何をやっていいのかこれっぽっちもわからない。せめて、算数の授業だけでも何とかしないと、思っていました。

ところが、その算数の授業ですら全くうまく行きませんでした。さあ、次の問題に進もうというときになって、決まって誰かが分かっていることに気づくのです。そして、その子を見捨てることができなくて、何とか分かってもらおうと必死に説明をこねくり回す。すると、結局最後には問題練習をする時間がなくなる。ぼくは、そんな授業ばかりを繰り返していました。

当時のぼくは、授業がうまくいかないいつも

「教師が本気で準備をして、本気で授業をすれば、きっと子どもたちもわかってくれるはず。いまのぼくは技術や準備が足りないだけ。いつかきつとうまく行く。」

そう自分に言い聞かせていました。だから、

「もっともっと。」

と授業の準備にどんどん時間をかけるようになっていきました。

そんなことを繰り返していたある日、ぼくはついに深夜の2時になっても学校にこもっていました。一人で算数の授業の準備をしていたのです。前の授業で指導員の先生に「やっぱり自作の教材がないとね…」と指摘されており、ぼく自身も、3年生の「かさ」の単元でL・dL・mLの関係を視覚的に捉えることができるためには、どうしても自作の掲示物が必要だと思っていました。それが深夜の2時を回ってようやく完成。

「今度こそ大丈夫。こんなに準備したんだから、明日は絶対みんなわかってくれる。」

そう信じていました。

翌日、眠い目をこすりながらも算数の授業を迎えました。そして、いよいよ授業は山場へ。ぼくは「どうだ！」と言わんばかりに、自作の巨大掲示物を黒板に貼り付けました。

「これがmLでしょ。そしてこれがdL。じゃあ、これは…？ そうLです。」

と自信満々に説明しました。よしっ、今までで一番うまく説明できた。これなら絶対に大丈夫。そう思ったぼくは、内心ウキウキしながら

「では、練習問題をやってみましょう。」

と言いました。ところが次の瞬間、ぼくは信じられない光景に目を疑いました。ついさっきまで、ぼくの渾身の説明をあれほど熱心に聞いていた子が、練習問題を前にポカーンとした表情を浮かべて固まっているのです。

「なんでだ！ なんでこんなに準備したのにわかってくれない！」

ぼくは心底打ちのめされました。そして、その時少しずつ疑い始めていたことが確信に変わったのです。

(やっぱり今までのやり方では、いつまで経ってもすべての子を救うことはできない。)

自分が努力すれば、いつかすべての子が救える。そう信じたかったけれど、もう限界でした。このままでは、クラスのわからない誰かを見捨てて、それを見て見ぬふりをしながら教師をしていくしかない。そう思いました。だけど、それなら教師なんて続けていられない。絶対に方法はあるはずなんだ。だけど、どうやったらいいのかわからない…。

そんな時、普段は立ち寄らない本屋の教育書コーナーに、とある一冊の本を見つけたのです。『最高のクラスの作り方』、岩瀬直樹さんとその学級の子どもたちが書いた本でした。そこに描かれていたのは、これまでの教室とは全くの別世界でした。特に算数の授業風景にぼくは釘付けになりました。その教室では、わからない子が他の子に自由に質問して、お互いに学び合っていたのです。

「これだ！ 見つけた！ やっぱり、みんなが楽しく学べる教室は作れるんだ！」

ぼくは直感的にそう思いました。次の日の夜、その本の裏表紙に岩瀬先生のメールアドレスを見つけ、ぼくは岩瀬先生にメールを送っていました。

「ぜひ一度お会いしたいです。お話を聞かせてください。」

すると、まさかの返事が返ってきました。

「今度の夏休みに、先生の学校っていう2泊3日の研修会をやるから、よかったらそこに来ませんか？」

ぼくは即決して、その研修会に参加することになりました。

【小学校1年目 夏休み「先生の学校」】

先生の学校という研修会はEFC(Educational Future Center)という団体が主催していました。メンバーは岩瀬直樹さんの他に、長尾彰さん、中川綾さん、甲斐崎博史さん、伊垣尚人さんなど、いずれも超一流のファンリテーターや教師の方々でした。失礼ながら、ぼくは当時彼らのことは全く知らなかったのですが、

「変な人たち。だけど、なんか凄そう。」

とだけは感じていました。(その後、彼らには現在に至るまでに大変お世話になっています。ありがとうございます。)

その研修会の中で、中川綾さんから「オルタナティブ教育」についての講義があり、はじめてイエナプラン教育を知りました。子どもたちが自分で選び、自立して生活している。こんな世界があったのか…ぼくは圧倒されました。さらに、続けて伊垣尚人さんの実践報告があり、このような教育が岩瀬先生の教室だけではなく、他の日本の教室でも行われていることに衝撃を受けました。

「ああ、ぼくが目指すものはこの方向にある。」

そう確信した時でした。

これがぼくとイエナプラン教育の出会いです。その時はまだイエナプランについて多くは知りませんでした。それでも、大げさではなく、イエナプランとはどん底に居たぼくにさした希望の光であると同時に、ぼくのモデルとなる教師たちとの出会いでもありました。

ですから、現在に至るまでの3年間、ぼくは彼らの実践を追いかけてきました。失敗ばかりしていましたが、今年度新天地(現在、4年生24名の担任。単学級)に移り、ようやく自分のイメージしていた教室に近づけてきた実感があります。そして、少しずつ自分なりに創意工夫した取り組みもできるようになってきました。

これらの取り組みのベースには間違いなく、岩瀬先生の信頼ベースの学級ファシリテーションの考え方、イエナプラン教育の考え方があります。教師としてのあり方、考え方を磨くことの大切さを改めて感じているところです。さて、今回は今年度の9月から取り組んでいる3つの実践(ブロックアワー、哲学サークル、探究学習)をご紹介します。

【実践報告1:ブロックアワー】

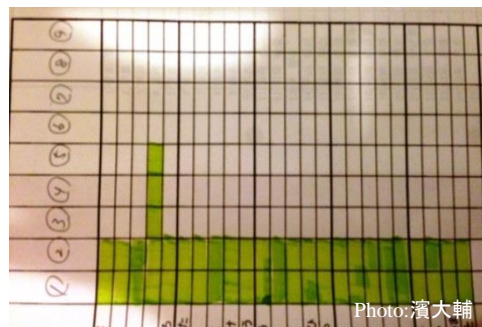
まずは、ブロックアワーです。イエナプラン教育では、1日の内に約2時間程度のブロックアワー(自立学習)の時間があると聞いています。自分に必要な課題を選んで取り組み、タイムマネジメントをし、学び方をも学ぶ時間のことを指すのだと理解しています。

先ほどご紹介した、ぼくの初任時代の算数の授業がなぜ上手くいかなかったのか、今となっては火を見るよりも明らかです。それは、子どもたちが一人一人違う存在だということを真に前提としていなかったからです。一人一人が理解するために必要な時間、適した学び方は違って当然です。また、分からない時に助けを求められることができる人が、数十人の子どもたちに対して、教師1人だけというのはあまりにも貧弱です。ひよっとしたらこのような授業を展開する腕を磨いたスーパー教師ならば、あるいは子どもたちは理解できるのかもしれませんが。しかし、もしその教師がいなくなったら、子どもたちは学び続けられるのでしょうか。ぼくにはそうは思えません。このような理由から、算数の時間全てと、国語の一部の時間を使って、ブロックアワーに取り組むことにしました。

オランダのイエナプラン校のものを参考に、次の写真(写真1)のような週予定表を作成しました。また、クラス全員の学習課題の達成状況を把握するために、次の写真(写真2)のような名簿を合わせて用意しました。例えば、算数の時間は次のように進みます。



曜日	算数	国語	英語	音楽	体育	保健
日						
月						
火						
水						
木						
金						
土						



生徒	算数	国語	英語	音楽	体育	保健
ア						
イ						
ウ						
エ						
オ						
カ						
キ						
ク						
ケ						
コ						

写真1: 週予定表

写真2: 名簿

- ①はじめに、その授業で扱う教科書のページをipadで撮影し、Sketchというアプリ(電子黒板のように、写真に文字や線を書き込んだり、拡大したりできる)でテレビに映し出します。
- ②映し出した映像を使って、5分以内でその時間の課題について子どもたちに教えます。
- ③自立学習の時間になります。その日の課題は、その日の内に終わるように取り組みます。(読み・書き・漢字などもこの課題に組み込んでいます。)その他週の課題のどれに取り組んでも良いし、週の課題が全て終わった子はコンピュータ室で探究学習のプロジェクトを進めても良いです。算数の教科書問題の答え合わせは自分でやります。

答えは次の写真(写真3)のように、プラ段に朱書き教科書のコピーを貼り付けて、黒板下に置いています。課題ができた子は、ぼくの所に来てチェックを受けます。説明が必要な課題は、ぼくが納得できるまで自分の言葉で説明してもらいます。(この納得するレベルはかなりシビアです。例えば、「1とは何か説明する」という課題の場合、子どもが一通り説明した後、ぼくは「じゃあ、面積って何?」「正方形ってどんな形?」と質問を重ねています。)

次の写真(写真3)はある算数の時間の1コマです。その時間に教わった算数の課題に取り組む子、算数の予習をする子、漢字の練習をする子、読書をする子、コンピュータ室に行って調べ物をする子など、各自が取り組んでいる課題はバラバラです。基本的に個別学習になりますが、わからないことがあればいつでもクラスメイトに聞いて良く、お互いが緩くつながり合っています。



写真3: 答え合せの様子

このように、課題を週単位で示したことによって、子どもたちの心にもゆとりが生まれたように感じています。ある課題につまずいて遅れが出て、次の日には遅れを取り戻している子がいたり、週の始めの2日に全ての課題を終え、どっぴりと本の世界に浸かる子もいたりします。(教室には私物の本を700冊程度置いています。)

「最近授業の進め方を変えたけど、どんな感じ？」と聞いたところ、「うん、いい感じ！」

との答えでした。現段階でも心地良いゆったりとした時間が流れており、良いスタートが切れました。また少しずつ改良していきたいと思います。

■実践を行う上での参考文献■

《週予定表について》

『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』(リヒテルズ直子著 2006)

《ブロックアワーに組み込んでいる、読むことの学習について》

『リーディング・ワークショップ』(ルーシー・カルキンス著、吉田新一郎・小坂敦子訳 2010)

『「読む力」はこうしてつける』(吉田新一郎著 2012)

《書くことの学習について》

『ライティング・ワークショップ』(ラルフ・フレッチャー & ジョアン・ポータルピ著、小坂敦子・吉田新一郎訳 2007)

『作家の時間』(プロジェクト・ワークショップ編 2008)

【実践報告2: 哲学サークル】

2つ目は、哲学サークルです。毎週の道徳の時間を使って、丸々1時間、哲学的なテーマについてお互いの考えをひたすら話し合うという至ってシンプルな活動です。

なぜこのような活動を始めたかという、ぼくの一般的な道徳の授業に対する嫌悪感が原因にあります。一般的な道徳の授業とは、資料を読み取り、その主人公の気持ちに共感し、何らかの道徳的な価値を子どもたちから引き出そうとする授業です。あたかも道徳的な判断に正解があるかのようにして。だけど、本当に道徳的な判断に正解なんてあるのでしょうか。いつだって人に手を差し伸べるのが良いとは限らないし、いつだって人を信じるのが良いとも限らないはず。そんな単純なことなら、この世には幸せの教科書のような物が存在して、人は皆とついに幸せに暮らしているはず。

でも、現状そうっていない。つまり、何が道徳的に正しいかなんて、そんなに簡単に判断できる問題ではないということです。そういった判断はあらゆる要素が複雑に絡み合っていることを前提になされるべきであって、そういったあらゆる要素を削ぎ落とした「読みもの資料」という現実にはありえない世界の中で、主人公になりきって行なった判断など、学習者にとって何の意味もないものであるとすら思うのです。

もっと率直に言えば、一般的な道徳の授業には、道徳的な判断とは様々な要素を考慮して熟慮に熟慮を重ねてするべきものである、ということのを隠してしまう危険性すらはらんでいる、とさえぼくは思います。何が道徳的に正しいかということに正解なんかないはず。それならば、常により道徳的に正しいと自分なりに納得できる判断(納得解)とは何かと考え続ける人をこそ、ぼくたちは育てなければならないのではないか。そう考えたのです。

しかし、それでは一人で悶々と「何がより道徳的に正しいか」と考え続ければ良いかといえ、それだけでは足りないでしょう。自分と違う考えに触れることで、より納得できる考え近づくことができるはず。そういった話し合いの作法、考え方の作法を学ぶことが、自分や他の人の幸せにつながるはずだと考え、哲学サークルを行うことにしました。

授業の概要はこうです。まず自分の椅子を動かしてサークルを作ります。その後、ぼくがろうそくに火を灯して対話の時間が始まります。はじめにテーマを募ります。ぼくがあらかじめ考えていたテーマも提案しますが、子どもたちの意見も聞いてその場で決定します。あとはひたすら、そのテーマについてトーキングオブジェクト(ぼくのクラスでは「チャーリー」という名前のくまのぬいぐるみ)を挙手した人に回して話し合うだけです。この時間には、あらかじめルールを定めています。それは以下の通りです。

- ①正解はありません。だれもが納得できる答え(納得解)を探し続けます。
- ②話を最後まで聞きます。
- ③考えが変わることはよいことです。

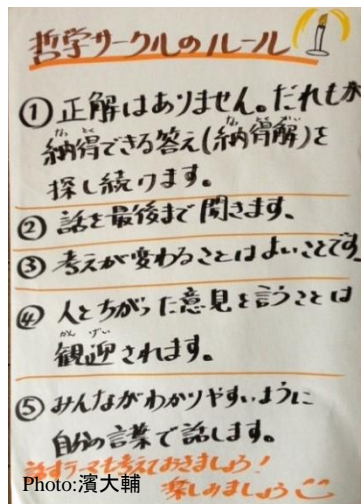


写真: 哲学サークルのルール掲示物

④人と違った意見をいうことは歓迎されます。

⑤みんなが分かりやすいように、自分の言葉で話します。

最後に、テーマについてのその時点での自分の考えを書いて終わります。

それでは、もう少し詳しく授業の実際について紹介します。初回は、ぼくの提案した「勉強って何のためにするの？」というテーマで、2回目は子どもたちから提案された「未来」「人類」とぼくの提案した「幸せ」も含めた投票の結果、「人類」に決まりました。話の入り口はシンプルに「人類って何？」からスタートです。

子「人類って、2足歩行のやつ。」

子「えっ、でも2足歩行って他にもいるよ？」

子「んー、頭が賢くなって脳みそでっかくなつた生物のこと？」

子「地球のどっかのタイミングで生まれたものだけど、50億年後には太陽がなくなるから滅びる生物だと思う。」

子「そう、いつか滅びる！」

子「賢い人類がたくさんいれば生き残るけど、馬鹿な人類がたくさんいると戦争して、おしまい。」

担任「ほお。馬鹿だから人は戦争をやっちゃうの？」

子「この前、教頭先生が石油を取り合ってるって言ってた。」

子「石油をたくさん取って、自分の国を有利にしたいんですよ。」

担任「先生もそれは聞いたことがあるよ。だけど、それなら分け合えばいいんじゃないの？なんで、それができないの？」

子「そりゃ、欲しいからでしょ。欲しいものは取っちゃう(笑)」

子「だって、石油はあんまり取れないし、限りあるものだから。」

担任「でも、そんなこと続けてたらまずいんじゃない？」

子「だけどさ、代わりになるエネルギーを見つければいいんじゃない？」

子「そうそう、太陽電池とか使えばいいじゃん。」

子「えっ、でも太陽電池のパネル作るのも石油がいるんじゃないの？」

と、こんな調子で考え続けました。身を乗り出して「ねえ、次チャーリー俺にちょうだい！」と言う子もたくさんおり、白熱した話し合いになりました。この時間のぼくの役割は、一言でいえば話し合いの参加者としてのモデルを示すことでした。特に、子どもたちは違う意見を言うことや疑問を投げかけるということに慣れていないようでした。そのため、ぼくが意図的にそういった発言をするように心がけました。この際、ぼくは本質に迫る問い(『探求する力』市川力 2009で提案されている、国際バカロレアのKey Conceptに対応している問い。)を駆使して質問しました。最後に、自分の考えを書いたノートにはこんなことが書かれていました。

A子「せんそうでは、ケンカじゃなくって、何かの取り合いだと知った。もし、石油がなくなったらどうしよう、って思った。今はどのくらい石油があるんだろう。どうしてせんそうなんてするんだろう？」

B男「人類について 石油問題。石油は人類に必要な物。電気も石油から。きかいも石油から。だから、石油は必要なもの。大切にしなければ。石油1てきでも大切じゃー。なくなったらどうしようー。ー。ー。」

この感想にも現れているように、子どもたちは何らかの答えに行き着いたわけではありません。むしろ新たな疑問や問題意識を持ったり、モヤモヤしたまま終わりました。ぼくは、これが大切だと思います。「自分にはまだまだわからないことがあって、だから考え続けること、学び続けることが大切なんだ。」と思える人こそが、自分と他の人を幸せにしていけるはずだと思うからです。この実践はまだまだ始まったばかり。これからも根気強く、そして何より楽しく、続けていきたいと思えます。

■実践を行う上での参考文献■

《ぼくの道徳教育に対する考え方について》

『道徳教育はホントに道徳的か？』(松下良平著 2011)

《哲学サークルの実践について》

『ちいさな哲学者たち(DVD)』(ジャン＝ピエール・ポツィ 2012)・『ソクラテスのカフェ』(マルク・ソーテ 著1996)

全国で哲学カフェを主催する団体であるカフェフィロの取り組みなどを参考にしています。また、福島県の小学校教諭である坂内智之さんが哲学の授業をされていると知ったこと、箕面子どもの森学園の哲学キャンプ2013に参加させていただいたことも、ぼくがこの実践を始める大きなきっかけとなりました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

【実践報告3: 探究学習】

最後にご紹介するのは、探究学習です。ざっと説明すると、子どもたちがあるテーマに対して感じた疑問を、実在の人物、本、インターネットなどを情報源として探究し、成果をプレゼンテーションなどの形で発表する学習です。これをなぜ一般的に言われるように、「調べ学習」と呼ばないかと言われれば、理由はいくつかありますが、一番大きな理由は**こういう学習者を育てたいという明確なゴールがあるから**です。

ぼくがこの学習で目指すゴール、すなわち学習者像とは、大きく分けて2つあります。

一つ目は、「**自立して学び続ける子**」です。月並みな表現になりますが、ぼくたちは複雑で変化の激しい社会に生きています。知識はすぐに陳腐化し、従来のような暗記型の学力、正解か不正解かの二者択一の思考力はほとんど使い物になりません。必要なのは、常により望ましいものを求めて深く考え、変化し続ける(学び続ける)力だと思います。このような力を身につけるために、3つの視点が重要であると考えています。

①まず、学習者が自分がいかに無知で無能であるかを知ることです。今の時代は子どもでもテレビやインターネットからたくさんの情報を得ることができます。大人も顔負けの情報を得て、ややもすると何だか自分は何でも知っている知識人のような気さえしてくるものでしょう。そして、その時学びはストップします。しかし、本当にそうなのでしょうか。世の中にはテレビやインターネットから得られる情報をただ受信しているだけでは得られないたくさんの深い洞察や、表に出てこない情報があります。これらに触れれば、自分がいかに無知で無能であったか恥ずかしく思いながらも、もっと成長できるという期待感を抱くことができるはずで、このような感覚を持ち続け、物事をより深く考えられるようになること、もっと知ろうとし続けることが本当に大切なことだと思います。

②次に、学び方を学ぶことです。インターネットのみならず、本や実在の人物から情報を得ることも重要な学び方です。また、学ぶためには質の高い問いを自ら生み出すことができることが重要です。自分に問い続けられる人こそ、自立して学び続けられる人でしょう。これらの学び方は自然発生的にも身につくものであるとは思いますが、しかし、先輩の学習者として、教師が教えた方が良くも多くあるでしょう。

③最後に、学ぶことを楽しむことです。学ぶことは、とすると大人になった時に困らないようにするため、などと考えられることが多いように思います。しかし、目の前の子どもたちはいつ死ぬともわからない存在なのです。それなのに、将来のためばかりに学ぶというのは、どこか肝心な部分が抜け落ちているように思うのです。子どもたちは今、幸せに生きていなければなりません。それが一日のほとんどの時間を過ごす学校、教室の中で保証されないとすれば、一体どこで保証されるのでしょうか。誰だって楽しいことは続けられるものです。ですから、3つの視点の内でのこの視点だけは忘れてはいけない、とぼくは思います。

二つ目の学習者像とは、自分と他の人の幸せのために自分にできることを考える子です。例えば自分が楽しく学び続けていても、それがいつも他の人の幸せにつながっているとは限りません。一方で、他人の幸せばかり考えて、自分を犠牲にしている人生も不幸だと思います。ですから、自分が学んでいることが、自分の幸せと他の人の幸せの両方につながっている状態にできるならそれに越したことはないと思うのです。結局、こういう視点をもっている子だけが、自立して学び続けられるのだと思います。

さて、前置きが長くなりましたが、以上のような考えで始まったのが、ぼくの実践する探究学習です。ぼくの学校では、総合的な学習の時間のテーマが「食・農・環境」と掲げられており、全学年何らかの野菜を育てることになっています。夏休み前までに4年生24名のぼくのクラスでは、自分の育てたい野菜でチームを組んで、9種類の野菜を育ててきました。そして、9月以降が本格的な探究学習のスタートです。以下は今後の学習の大まかな流れです。(現在はまだ①の段階です。)

①まずは、「食と環境」というテーマに当てはまるDVDを全員で見ます。この時、本質に迫る問い(『探究する力』市川力著 2009)を使って、各自問いを書き出しながらDVDを見ます。

今回見たDVDは、小学校の給食を全てオーガニックにする取り組みをしたフランスのとある村の1年間を追ったドキュメンタリー『未来の食卓』と、チェルノブイリ原子力発電所の事故が今も周囲の人たちを苦しめている深刻な状況取材した『チェルノブイリ・ハート』の2本です。

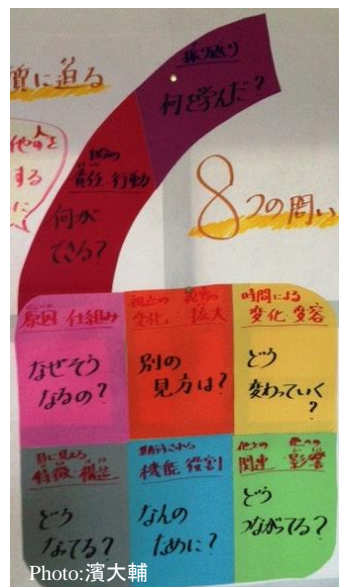


写真: 本質に迫る8つの問い

②このDVDを見た後、探究したい問い出し合い、探究したい問いが近いもの同士でチームを組みます。

③その後、クラス全体でプロジェクトが終わったときに自分たちはどのような状態になっているのがよいのかという評価規準をつくります。

④続いて、チームごとに企画書を作成し、保護者と担任に承認のサインをもらいます。

⑤企画書が承認されたチームから探究開始です。

実在の人物、本、インターネットの2つ以上を情報源とするのが条件となっています。この段階では、授業の最初にぼくが5分程度で、データの保存と整理、インタビューの仕方、信頼できる情報の見分け方などの「学び方」を教えるミニレクソンを行います。その他に、各チームとカンファランスを行い、進捗状況の把握とより深く探究するためのアドバイスをしたり問いを投げかけたりします。毎時間の探究の終わりにはノートに自己評価を記入して終わります。

⑥国語の授業と関連させて、発表の準備をします。発表の方法は主にポスター発表を考えています。

⑦授業参観等で発表します。

⑧このプロジェクトを通して学んだことをレポートに書き、学習を振り返ります。



Photo: 濱大輔

写真: DVDを見て問いを作る子どもたち

次の写真は、DVD「未来の食卓」を視聴している様子です。

子どもたちにとっては高度な内容だとは思いましたが、自分たちにはまだまだ知らないことがたくさんあるということ、食の問題に対して真剣に取り組む人たちがいるということを感じてもらいたく、見ることにしました。単調な展開に少し疲れてしまった子もいましたが、「えーっ、殺虫剤ばっかりじゃん！」と驚く声も聞かれました。子どもたちのメモには「ぼくたちの給食は有機農法の作物なのかな？」といった問いが書かれていました。フライングしてチームを組んでいる子がいたり、「もう調べること決めた！」と言う子がいたり、滑り出しは順調です。

子どもたちの深い探究を支えるためには、教師自身がテーマについて深く学ぶことが重要であると考えます。そうでなくては、子どもの探究を促すアドバイスや問いかけをすることが難しいと思うからです。今後子どもたちと一緒に学んでいけることが楽しみです。これからの展開も、またどこかでご報告できればと、考えています。

■実践を行う上での参考文献■

『探究する力』(市川力著 2009)

『学びの情熱を呼び覚ます プロジェクト・ベース学習』(ロナルド・J・ニューエル著、上杉賢士／市川洋子訳 2004)

『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち』(上杉賢士／市川洋子 2005)

『プロジェクト・ベース学習の実践ガイド』(上杉賢士 2010)

さて、実は先述のほとんどの実践については、9月上旬に書いたものでした。原稿の執筆中とその後も、教室で子どもたちとの時間を過ごす中で、ぼくの教育に対する考えは変わり続けてきました。そして、この度一つの大きな決断をしました。それは公立小学校の教員を退職することです。

9ヶ月の特別支援学校講師、そして3年半の公立小学校教諭という短い期間ではありましたが、イエナプラン教育からたくさんのことを学びました。学んだことがたくさんあり過ぎて、すべてをここに書き出すことはできませんが、一番に浮かぶことは「選ぶ」ことの大切さです。

ぼくはこれまでに、今回紹介した3つの実践以外にもイエナプランに通じる実践をいくつもしてきました。リーディング・ワークショップ、ライティング・ワークショップ、算数の学び合い、ホワイトボードミーティング、プロジェ

クトアドベンチャーなどなど…。これらのいずれにも共通しているのが、子どもたちが「選ぶ」ことができる、ということでした。「いつ」「どこで」「誰と」「何を」「どのように」学ぶのか。全てというわけではないけれど、これらについて選べることで、子どもたちは確実に学ぶ意欲を高めていました。

イエナプラン教育とはじめて出会った「先生の学校」。その中で、久保さんがインタビューしたイエナプラン校の子どもたちが、日本の子どもたちが毎日画一的な一斉授業を受けていることを知り、こう語ったという話を今でも覚えています。

「We should learn. But, we can choose.」

言われたことを言われた通りにやれば、この道をルールにのって行けば、絶対に幸せになれるというような時代はもうとっくに終わっています。学校を卒業すれば、人生は選択の連続であり、そのどれにも正解はありません。それなのに、学校にいる間は「選ぶ」ことを許さず、学校を出たら途端に「選ぶ」ことを求め、その結果苦しい状況になったとしても、それは自己責任であるとする。これはあんまりだと思います。今こそイエナプラン教育に学び、日本の子どもたちの手に「選ぶ」ことを取り戻す時です。

ぼくもこの度、退職という道を「選び」ました。この選択を「あの時、この道を選んで本当に良かった。」と思えるものにするために、日々、一瞬一瞬を悔いのないように選び、生きていきます。イエナプラン教育とそれに共感するたくさんの素敵な方々と出会ったお陰で、ここまでやってこれることができました。ご縁を頂いた全ての皆さまに、この場を借りて感謝の気持ちをお伝えします。本当に、本当にありがとうございました。皆さまが、今後とも悔いのない選択をし続けていかれましてを祈っています。ぼくは、これからも自分の信じる教育を実現する道を進みます。同じ志を持つ仲間として、かけがえのない友人として、今後ともどうか末長くよろしく願いいたします。



協会よりお知らせ

★協会のFacebookページをご活用下さい。

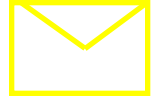
Facebook上で少しずつ情報共有や実践紹介などが始まっています。イエナプラン教育に関心を持たれている方や多様な教育に興味がある方にもどうぞご紹介下さい。また、お気軽にご意見等お寄せ下さい。

★会員更新手続きをお願いします

会員手続きをされてから1年以上経過した皆様に、事務局から会員更新手続きのお願いをしております。日本イエナプラン教育協会は、イエナプラン教育に関心のある方々とのネットワーク作りや情報提供をはじめ、日本でのイエナプラン教育の発展、普及のために活動しております。今後ともご支援頂きたくどうぞよろしくお願い致します。



Q1. 今日本国内でイエナプランをとられている学校や施設はありますか？

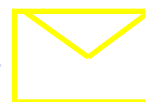


A:リヒテルズ直子より

イエナプランの最も重要な特徴は異年齢学級であることです。その意味で、日本では、複式学級でない限り異年齢学級は認められていないので実践は非常に難しいかと思います。ただし、サークル対話やブロックアワーの考え方は学年制での学級でも比較的容易に取り入れることができますので、個別の先生で、自分のクラスでできることを始めている方はいらっしゃいます。



Q2. 日本でモデル校となるイエナプランの第一校目をどのようにイメージされていますか？教育大学の付属校や、何か特色を求めている私立校か自治体？もしくは、日本の受験システムとは調和する必要のない、インターナショナルスクールや国際バカロレアがとれる学校・プレスクール・学童・幼稚園保育園などでしょうか。オランダではイエナプランをうたった第一校目はどのように実現されたのでしょうか。



A:リヒテルズ直子より

イエナプランは、まだ将来の職業に対する進路を考えないでよく、また、「学びとは何か」の基本を教えるという意味で小学校で取り入れやすく、重要な教育理念であると思っています。私自身は、「複式学級、教育大学付属校及び私立の学校、幼児教育、学童保育などから始めるのが良いのではないか。」と思っています。ただ、それぞれに限界はあります。

①複式学級の場合各年齢集団が均等に揃えにくいこと。でも、異年齢によって生まれる教室の豊かさという考え方は、複式学級についても十分に使えると思っています。仕方なくて複式学級、というのではなく、複式学級だからこそこんなことができるという発想の転換があたり得ると思います。

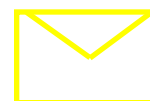
②付属校は元々大学の実験校であったはずですが、大半の付属校は受験のための進学校になっており、教員も選抜された優良教員という自負がある場合が多く、大学の研究との接続、協力が必ずしもできているとは言えない場合が多いです。また、先生方に何かを学ぼう、変えねばならないという意識があるとも言い難いことが多いです。しかし、日本の学校教育の変革は、国際的見地から見ればもう待たなしの緊急性を持っています。その意味で、付属校は、他の学校に比べて可能性をたくさん持っていると思います。全校レベルでダメならば、イエナプランを使った特別コースを作り、希望する保護者の承認の元でやる、という方法は多いにありだと思えます。ただし、その場合、教育学の専門の先生が、数人でチームを作って協力して進める必要があるでしょう。そういうベースがあれば、チームとしてのオランダ視察、または、オランダから指導者を呼ぶ、私が定期的に関わることも可能です。

③私立の学校も基本的に同じことが言えます。ただし、ペーターセンは、敢えて、そういう授業料の高額な私立学校の「売り」にするのではなく、イエナのようなあり方そのものが、一般の学校の考え方になるべきであるということを強調していました。その点は私も大変同感します。特殊な学校の特徴的の学校という風にユートピア化すると、元来公教育とはどうあるべきか、ということで、産業化社会型の学校に大きなアンチテーゼを提示しているイエナプランの、社会変革に対する強い意思が鈍化する。それは注意すべき点だと思います。

④幼児教育は、小規模で始めるという意味では、ありかな、と思います。ですが、モンテッソーリで起きたように、幼児教育の保育方法という風に閉じ込められる可能性もあります。幼児教育が義務教育ではないだけに、ここでも、学校改革議論への矛先を鈍化させられるかもしれないという危惧が残ります。

⑤学童保育も同様です。元来、学童保育は、学校ではないですから、教科学習はやらない。サークル対話やワールドオリエンテーションのような探求的な活動に一部取り入れることはできると思いますので、実験的な場にはなると思えます。しかし、それによって、イエナプランとは、遊びながら学ぶ、教科学習とは関係のないもの、というイメージになるのは考え物です。イエナプランは、教科学習、学力の向上を決して軽視しているわけではありません。

(※次ページへ続く)



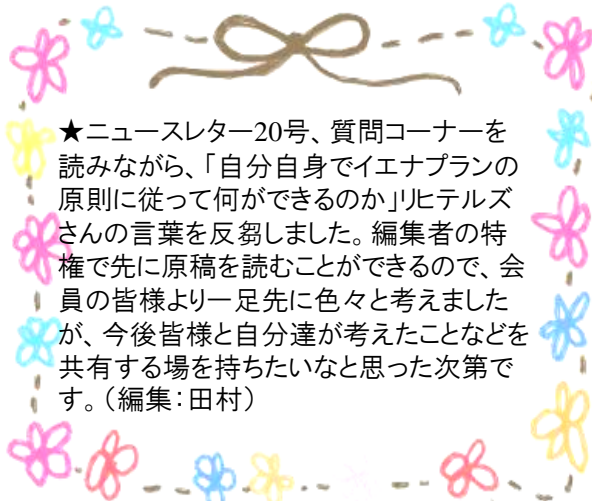
むしろ、一人一人の個性を引き出しながら、学習することを本人にとって意味のあるものにすることを強調します。そのためには、学校に行った後の「保育」にそこまで教科学習を取り入れること自体、考えてみるべきことがありますし、学童保育は、あくまで、部分的な実践ということを意識して、というのが条件だろうと思います。

オランダでは、フレネ教育の信奉者が、初めにイエナプランを取り入れました。まず、低学年を二年制、三年制にして、小さい規模でやり、次第に小学校全体に広げて行きました。また、教材研究にとってもこだわっています。個別の子供のテンポに合わせたレベル別の教材を自分たちで作って、プラスチックのカバーをつけて、経年で使えるように教室に常備するように行きました。また、お互いの情報交換のために、地域ごとに勉強会を開いて「教科ごとの教材研究」「ワールドオリエンテーションの教え方」「サークルの際の進め方」などを自分たちで研究しています。その後、全国組織を作って教員が一同に集い、お互いにワークショップをし合い、親睦するための合宿研修も始めています。同時に、指導者であったスース・フロイデンタールは政治家や文部科学省を説得して、直接、間接に、初等教育法の改正に影響を与えています。また、イエナプラン教育財団を作り、やがて、それが協会へと発展し、メンバーの払う年会費で、イエナプラン研究代表を雇い、機関紙を出して、情報交換をするようになりました。さらに、教員養成大学にイエナプラン教育受講コースを設け、協会が資格認定をできるように政府の認可を取得しています。

私自身は、オランダで大変な時間と努力をかけて進められたものを、日本で有効利用できるように既に作られた報告書を翻訳したり、長年の試行錯誤の成果として今ある姿を本にして伝え、また、オランダ研修によって、関心のある方が直接見る機会を作ってきました。日本での協会の設置や支部活動の推進も、オランダでの発展のいきさつから学んで進めているものです。日本の皆さんには、ただ、オランダではどうなのか、と考えることだけではなく、自分自身で「イエナプランの原則に従って何ができるのか。」を考え、また、それを仲間と共有して、できれば、テーマを決めて、ある程度固定したメンバーで、きちんと積み上げて勉強して行ってもらえると良いな、と思っています。この数年の間に、条件はかなり整ってきていると感じています。

★各支部のご案内

- 東京支部 info@japanjenaplan.org
- 千葉支部 chiba@japanjenaplan.org
- 埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org
- 関西支部 kansai@japanjenaplan.org
(京都支部 kyoto@japanjenaplan.org)
- 福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org



★ニュースレター20号、質問コーナーを読みながら、「自分自身でイエナプランの原則に従って何ができるのか」リヒテルズさんの言葉を反芻しました。編集者の特権で先に原稿を読むことができるので、会員の皆様より一足先に色々と考えましたが、今後皆様と自分達が考えたことなどを共有する場を持ちたいと思った次第です。(編集:田村)